

### ～収穫後のほ場管理と秋まき小麦は種予定ほ場の準備～

#### 1 収穫後のほ場管理について

##### (1) 麦稈の利活用

- ・ 収穫後、麦稈を速やかに搬出して堆肥化に努めましょう。
- ・ 麦稈を直接ほ場にすき込む場合は、ストローチョッパー（もしくはロータリハロー）による細断を行い、浅め（5 cm 程度）にすき込むことで腐熟促進を図りましょう。
- ・ 麦稈すき込み時の窒素施用は、硝酸性窒素による地下水汚染の可能性があるため、行わないようにしましょう。

##### (2) 後作緑肥の導入

緑肥作物の作付けは、地力維持・土壌病害の発生軽減・土壌浸食防止等に有効です。特性を考慮して選択し、生育確保のため8月中旬頃までには種を行いましょう。

##### 【後作緑肥の栽培例】

緑肥名	は種量 (kg/10a)	施肥量(kg/10a)			作付効果
		窒素	リン酸	カリ	
えん麦	15～20	4～6	5～10	0～5	有機物補給、雑草抑制
えん麦野生種	10～20	5	5	0～5	キタネグサレセンチュウ抑制、有機物補給、後作のばれいしょのそうか病軽減
えん麦 +ハリーベッチ	3～5 3～5	3～6	6～8	0～6	有機物補給、菌根菌増加、雑草抑制
シロカラシ	2	5～8	5～10	0～7	有機物補給、易分解性窒素供給、麦稈のC/N比調整、景観形成

※すき込み時期は、は種後 60 日頃（結実前）を目安とします。

※土壌中のリン酸およびカリが過剰となっている場合は、窒素のみの施用とします。

##### (3) 後作に対する土壌物理性および化学性の改善

- ①土壌物理性の改善を図るため、心土破碎を積極的に実施しましょう。

##### 心土破碎機（サブソイラーなど）施工のポイント

- ・ 施工間隔は 120～150cm 程度とし、施工深 30～40cm 程度を確保する
- ・ なるべく土壌水分が低い状態で実施する（過湿時の施工は「練り返し」により逆効果になるおそれがあります）
- ・ 施工深の確保と土壌中に亀裂を確実に入れるため、できるだけゆっくり施工する（時速 3～4km が目安）
- ・ 暗きよと 90～45 度の角度で交差するように施工する

- ②収穫後は跡地の土壌診断を実施し、次作に備えましょう。

##### 土壌改良のポイント

- ・ pHは 6.0 を目標に改良する
- ・ リン酸・カリは土壌分析値に基づき、適正量を施用しましょう。

## 2 秋まき小麦をは種するほ場の準備

### (1) 前作で雑草の多かったほ場における除草対策

前作で、コヌカグサ（レッドトップ）、スズメノカタビラ、エゾノギシギシ等の雑草が多かったほ場では、は種前に、非選択型除草剤による雑草処理を行きましょう。特に連作を予定しているほ場で、雑草の発生が多かった場合は、必ず実施して下さい。

【耕起前に使用できる除草剤例】（登録内容は平成29年8月1日時点）

除草剤名	使用量 (ml/10a)	使用時期	水量 (L/10a)	回数
ラウンドアップマックスロード	200～500	耕起前またはは種前 (雑草生育期)	25～100	3回以内

※1 多年生イネ科雑草は、15cm以上再生してからの処理が有効。

※2 雑草の茎葉が乾いてから散布する。また、散布後すぐに降雨のない日を選んで処理を行う

※3 散布水量25～50L/10aで少水量散布を行う場合は、専用ノズルを使用する

※4 展着剤は加用しない。

※5 周辺の作物に薬液がかからないよう注意するとともに、ドリフト低減ノズル使用が望ましい。

### (2) 春まき小麦跡地に作付けする場合

春まき小麦の「野良生え」が懸念されますので、極力、秋まき小麦の作付けを控えるようにして下さい。止むを得ず作付けする場合は、収穫後に以下の処理を確実にを行い、なるべく春まき小麦の種子が残らないようにしましょう。

- ・ プラウ耕が可能な場合は、プラウ耕により種子を埋没させます。
- ・ プラウ耕ができない場合は、収穫後なるべく早めに、浅くロータリー耕を行って発芽させた後、もう一度ロータリー耕を行って処理します。
- ・ 再度発芽したものを「ラウンドアップマックスロード」等で枯死させて下さい。

### (3) pHの確認

作付前にpHを測定・確認して土壌改良を行きましょう（pH6.0目標）。特に、馬鈴しょ跡や転作ほ場ではpHが低いおそれがありますので、注意して下さい。

#### 農薬安全使用

- ・ 必ずラベルを読み、使用量・時期・回数を確認し、適正に使用しましょう。
- ・ 周辺作物への農薬飛散には十分注意しましょう。

#### 農作業中の熱中症に注意！

暑熱環境下での農作業は、熱中症（熱射病、熱けいれん、熱まひ等）を発症しやすいので以下の事項に注意してください。

- 日中の気温の高い時間帯を外して作業を行うとともに、休憩をこまめにとり、作業時間を短くする等、作業時間を工夫しましょう。
- 水分をこまめに摂取し、汗で失われた水分を十分に補給しましょう。特に気温が著しく高くなりやすい施設内での作業では、十分に注意しましょう。
- 帽子を着用するとともに、汗を発散しやすい服装をしましょう。